発問例

●一九〇ページ

問 **「言わぬと、これだぞよ。」（2行目）の「これ」とは、どのようなことを指しているか。**

答 刀で切り捨てること。

補 次行の「太刀の鞘を払って」云々とある点に気づかせる。

問 **老婆が「両手をわなわな震わせて」（9行目）いるのを見て、下人はどのような気持ちになったか。**

答 ある仕事をして、それが円満に成就したときに味わう、安らかな得意の気持ちと満足な気持ち。

補 憎悪の気持ちは消えており、下人の抱いた正義感は、すぐ冷めてしまうような衝動的な正義感であったことが分かる。

問 **「肩で息を切りながら」（6行目）とは、老婆のどのような状態の描写か。**

答 驚きと恐怖のために、苦しそうに、肩を上げ下げして呼吸をしている状態。老醜を表す描写。

問 **◉「この意識は、……冷ましてしまった。」（9行目）とあるが、なぜか。**

答 恐怖におののく老婆の生死を完全支配した下人の優位性によって、憎むべき対象として感じられなくなったから。

補 下人の悪を憎む気持ちは、自分の了解を超えた異常事への衝動的、感情的な反応にすぎなかった。老婆に対する自己の優越を意識して、感情の過度の高ぶりはその対象を見失ったのである。

問 **「ある仕事をして、それが円満に成就した」（10行目）とあるが、ここでの「ある仕事」とは、具体的にどのようなことか。**

答 許し難い悪人を取り押さえること。

補 困難極まる使命を見事成し遂げた英雄的行為という思いに浸る下人の心理。

問 **◉わざわざ「役人」であることを否定して、「旅の者」（13行目）と名乗ったのは、なぜか。**

答 自分を満足させた行為について、秩序を守るための正当なものに擬えたうえで、盗人になろうとした過去を隠しつつ、老婆に捕えられる心配がないことを示し、詳しい事情を物語らせようと思ったから。また、主人から暇を出された失職の身だと本当のことも言えず、また、今、この羅生門にいることへの負い目もあったから。

補 「少し声を和らげて」とある下人の意図を考える。

●一九一ページ

問 **老婆の目、唇、喉、声の描写は全体としてどのような印象を与えるか。**

答 まだ油断できない得体の知れない薄気味悪さに包まれた印象。

補 無力に捕らえられたとはいえ、安心できない得体の知れなさがある。比喩の効果的使用にも注意。

問 **◉「平凡なのに失望した」（6行目）のは、なぜか。**

答 老婆の行為の動機が、自分の正義感や悪を憎む心に見合わないものだったから。

補 期待と結果との落差が生む失望。悪の光彩を放っていた老婆の行為は、あまりにも現実的で卑小な動機による凡庸な行為へと色あせてしまう。老婆の行為のその動機が、自分の正義感や悪を憎む心には、見合わないものだったのである。

問 **「前の憎悪」（6行目）とは、どのような憎悪か。**

答 「死体の髪を抜く」という「悪」の行為への憎悪。

補 同じ対象への憎悪であるから、「前の」と指示されているが、内容としては、「異常な悪」への怒りの憎悪から、「つまらぬ悪」への侮蔑の

憎悪へと、対極化している。また、論理的、合理的な判断から出たのではなく、その場の気分に従う感情的な心の動きという点では同じ傾向を示している。

問 **「その気色」（7行目）とは、どのようなことを言っているか。**

答 心に老婆に対する「失望」「憎悪」「侮蔑」の気持ちが生じたと感じられる下人の様子。

補 「気色」は態度や表情に表れた心の状態。下人の表情や態度に微妙な変化が起こったのである。

問 **「片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり」（8行目）という描写から、何が読み取れるか。**

答 手に入れたものをあくまで手放すまいとする老婆の執念。

補 老婆の行為が生きるための切実さに基づいていることを明らかにする描写である。

問 **老婆が「なんぼう悪いことかもしれぬ。」（10行目）と言いながら、後で「わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。」（一九二ページ・1行目）と言う根拠は、どのような科白に示されているか。**

答 「せねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。」

補 生きるためにしかたがなくすることになった自分の行為は悪ではないという論理。

●一九二ページ

問 ⊙**「大体こんな意味」（4行目）とあるのは、なぜか。**

答 老婆の論理の要点を二点に絞ってまとめると、①悪には悪で報いてもよい、②生きるためにしかたなくした行為は悪ではない、となる。下人は、女の死体から髪の毛を抜く理由を必死に詳細に語る老婆の心情には関心がなく、自分に都合のいい箇所以外は聞き流しているかもしれないから。

補 老婆の自己弁護のための論理であることを確かめる。

語句の研究

●一八九ページ

13 弩にでも弾かれたように　前行に「老婆が驚いたのは言うまでもない。」とあるように、不意の侵入者に対する驚きによって、老婆が悪鬼でも怪物でもなく、ただの人にすぎないことが早くも示されている。

14 おのれ、どこへ行く。　相手をののしる語気を込める。「おのれ」はここで二人称の代名詞から、感動詞に転じた用法。

●一九〇ページ

2 勝敗は、初めから、分かっている。　若く力のある男とやせ衰えた老婆では勝負にならない。

4 何をしていた。　下人は、老婆の異常な行為をすでに目撃している。実際に知りたいのはその理由である。目撃したことを言わずに、「何を」と問うのは、自分の手の内を見せず、老婆の口から行為の全体を語らせるためである。

4 言え。言わぬと、これだぞよ。　強者の立場から、弱者に迫る言葉で、いかにも性急で、脅しつけるような感じが出ている。

5 白い鋼の色　刀身の換喩である。芥川らしい表現と言えるが、技巧的に凝りすぎているか。冷たい切れ味を感じさせる。

7 執拗く　執念深く。じっと強情に。「しふねし」という古語に、同じ意味の「執しつ拗よう」という漢語を当てたもの。素性の知れぬ侵入者への警戒心が促すかたくなさである。

8 全然、自分の意志に支配されている　「全然」はここでは「全く」「すっかり」の意。老婆

が「ただの者」にすぎず、生殺与奪の権が自己の掌中にあることがはっきりした。

9 今まで険しく燃えていた憎悪の心を、……冷ましてしまった。　あまりにも無力な老婆を前に、異常な悪への憎悪は対象を失い、憎むことの根拠が消失する。欧文直訳体で、下人の新たな「意識」こそが中心にあって以下の下人の心理と行動を促すものであることを印象づける擬人法の表現である。

11 安らかな得意と満足とがあるばかりである。　生かすも殺すも自分の思いのままという新たな「意識」は、老婆をみごとに取り押さえた行為の成功に自己満足の味わいを与え、勝者の優越感と余裕を生み出す。

13 検非違使の庁　平安時代に都の警察、検察、裁判の権を握り、治安の維持をつかさどった役所。その役人は職掌から、庶民には権力をかさにした横暴者と見られていたことが考えられる。

13 旅の者だ。　下人が都の外から京へ上った者（主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ノコト）」の設定）か、それとも都で使われていた者かは見方が分かれる。京の町で使われていた者とするのが大方の論だが、異論も出されている（「鑑賞」参照）。いずれにしても、「少し声を和らげて」とあるように、老婆に強い警戒心を抱かせないように意図した言葉である。

●一九一ページ

1 まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目　「肉食鳥」は、猛禽類。他の鳥や小動物を捕食するワシ・タカ、フクロウなどを指す。「鋭い」は、腐肉をあさる貪欲さ、油断のない警戒心、得体の知れない不気味さの表現である。骨と皮の皺だらけの顔の中で、下人を凝視する剝き出しの目の異様さを印象づける。無力に捕らえられたとはいえ、異常な行為の理由がはっきりしない限り、老婆の気味悪さは消えていない。

キー・ポイント　動物の比喩　老婆の存在は、「猿のような」（P一八八・5）「鶏の脚のような」（P一九〇・3）「肉食鳥のような」（P一九一・1）「鴉の鳴くような」（P一九一・3）「蟇のつぶやくような」（P一九一・9）と、一貫して鳥獣の様態で身体的に特徴づけられ、これら小動物の生に類する老婆の姿をほうふつとさせる。その動作は、「猿の親が猿の子のしらみを取るように」（P一八八・11）と人間以下の行為を連想させる。いずれも人間の埒外に堕ちた陰にこもる薄気味の悪さを醸し、荒廃の世に動物的な生存としてかつがつ生を営む老婆のいじましさとその裏のしたたかさを印象づける。総じて嫌悪される暗い否定性の趣を持つと言えよう。なお、下人に関しては、「猫のように」（P一八六・8）「やもりのように」（P一八七・6）というように、その本能的な警戒心を特徴づけるものとして、その動作に対して用いられている。

6 老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。　異常な行動には、それに見合う異常な動機がなければならぬ、という無意識の期待が外されたために起こる失望。老婆の答えは下人の期待に反してあまりにも現実的で卑小なものであった。「存外」は思いの外。

6 失望すると同時に……心の中へ入ってきた。　老婆の答えが失望をもたらすものであったことは、先の「死体の髪を抜く」行為への憎悪をあらためて生じさせる。つまらぬことで自分に驚愕を強いたことが許せないのである。「前の憎悪」とはいっても、死者冒瀆の醜怪さへの人間的反応としての憎悪ではなく、卑小な目的のための功利的で醜悪な行為への憎悪である。下人は「許

すべからざる悪」を懲らした「得意と満足」を味わっていた。ところが実際の相手は、「平凡な」悪の鏽びた銭せんにすぎず、その結果、己の行為自体も価値の下落を強いられるのである。下人の心中で勝利の自己満足は色あせ、つまらぬ悪への侮蔑が頭をもたげる。

8 片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり　下人と争い、取り押さえられ、腕をねじ上げられても、老婆は自分が抜いた髪を片手に握ったまま決して離そうとしない。生きるための行為の切実さが如実に示されている。だが、「憎悪」と「冷ややかな侮蔑」の心で老婆を見る下人の目には、この切実さは全く映らない。

9 蟇のつぶやくような声　いわゆる濁だみ声ごえであるが、動物の直喩により老婆の醜悪さを印象づける。

11 そのくらいなことを、されてもいい人間ばかり　老婆が羅生門の死人たちの生前の行状をすべて知っていたとするのは不自然。引き取り手もない死人として遺棄された羅生門の死人たちがろくな生き方をしていなかったことは明々白々のはずだ、と決めつけ、老婆は「そんなことをされてもいい人間ばかり」と言ったのである。応報的に「悪いこと」をしたから「悪いこと」をされてもいいという論理を確実に当てはめられるのは、老婆がその髪の毛を抜く女に対してだけである。たまたまその生前の詐欺行為をよく知っていた女一人の例をいきなり一般的に拡大して、こいつらはみんな悪いやつなんだ、と語る点に、老婆の自己弁明の強引さが表れている。さらに敷衍すると、老婆にとってみれば、「悪いこと」をしなければ生きていけない以上、この世に生きる人間は誰でも「悪いこと」をしているはずだということになろう。「悪いこと」をしなかった人間なら、老婆がその髪を抜くことはない、という話ではない。理屈にならないところまで理屈にしようという強引さは、理屈抜きに「悪いこと」をせざるをえなかった老婆の生存の状況を逆に照らし出すものである。「口ごもりながら」無理な理屈を語る老婆は、理屈など立てている暇もなく、生きるためには死体の髪を抜かなければならない生の姿を語っている。

12 わしが今、髪を抜いた女などはな　「干し魚」の読みは原典で「ほしうを」とルビがある。この挿話は「今昔物語集」巻三十一第三十一話「大刀帯陣売魚嫗語（ノ）（ニウラヲウリシ（ノ）コト）」によっている。「蛇（クチナハ）ハ食（クヒ）ツル人悪（アシ）」とあり、食べると身体に毒になると考えられていたらしい。単なる商品詐称ではなく毒と知りつつ売ったことになる。そんな女の髪を抜いて、どこが悪いかという論理である。なお、女は、主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ラセウモンノボリテノウヘノカウニシビトヲミルニヌスビトノアルヲミテカタラヒシ（ノ）コト）」では、老婆の女主人で、葬る者がないので、老婆が羅城門に置いたとされている。

13 往んだわ。　「往ん」は、ナ変動詞「往ぬ」の連用形撥音便に、過去の助動詞「た」、確認の終助詞「わ」が付いた形。

15 この女のしたことが悪いとは思うていぬ。　自己の行為を「なんぼう悪いことかもしれぬ」と言い切る老婆に、事の善悪ははっきり自覚されている。世間的な規範に従う常識的、道徳的な判断力は備えているのだ。だが、生身の人間は道徳のかいらいではない。老婆の口から語られる女の詐欺商売には、生きるための庶民の切実ないじましさがある。これは、荒廃した世に何とか生きる方途を得ようとする庶民の不逞なたくましさ、といっても同じだ。この切ないし

たたかさは、ただエゴイズムといって済ますことのできない人間の相なのである。老婆の主張は、かつがつ生きるために選ばざるをえない行為に道徳的な善悪をあげつらっても無意味である、ということである。

16 されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。　老婆の論理を単なる言い訳、さらには自己正当化の居直りと読むか、生き延びることの切実さから絞り出された声として聞くかで、評価は対極となる。「長い抜け毛を持ったなり」（P一九一・8）、「口ごもりながら」（P一九一・9）語る老婆の言葉は、生存のぎりぎりの場所から、「悪いこと」と知りつつなおそうせざるをえない者の「しかたがない」生を裏打ちするものである。

●一九二ページ

3 おおかた……大目に見てくれるであろ。

「おおかた」は推量と呼応するときは、おそらく、多分の意。老婆の自我意識を示す。

「大目に見る」は、寛大に扱う、の意。

4 老婆は、大体こんな意味のことを言った。

老婆の会話の直前に「こんなことを言った。」（P一九一・9）とあるのに、また「言った」というのは重複だが、前後で応じることで段落の区切りをつける役割を果たす一行である。直接話法で会話を引いた後、「だいたいこんな意味」とあると、会話部分に省略があるとも取れる。書誌的には初出で間接話法であったものを直接話法に改稿した際、初出のまま残された箇所である。「こんな意味」は、老婆の論理展開を言う。「どうせただの者ではない」と下人から見られた老婆が、「ただの者」として口を利いたのである。ここに至って読者には、鳥獣の直喩で語られた老婆の気味悪さは消え、みすぼらしく弱々しい哀れな老婆の姿が、同じ鳥獣の直喩のもとで浮かび上がる。同時に羅生門のおどろおどろしい気配も消え、現実世界の舞台へと転換する。老婆の正体は尼僧ではないかという推測も可能だ。「檜皮色」は尼僧の衣の色であり、尼僧であれば短い髪も説得力を持つ。さらに、接続詞を駆使した老婆の論理的弁明や、「現に」「菜料」など漢語の多用からも、漢籍を修得したことがうかがい知れる。

キー・ポイント　老婆の論理　形式的には、初めに〈悪には悪で報いてよい〉という〈応報の論理〉、次に〈生きるために「しかたがなく」する場合、悪は許される〉という〈生存の論理〉が語られる。前者の〈応報の論理〉は、直ちに〈善に対して悪は許されるのか〉という疑問を生み出す。しかもこれは後者の〈生存の論理〉と重ねて、〈生きるために「しかたがなく」する場合、善に対して悪は許されるのか〉という問いを必然的に導く。〈死んだ女が善人であったなら、老婆は髪を抜かなかったのか〉と具体化できる問いである。老婆はそこまで追究し原理化する理路を踏まず、眼前の具体的な状況に即して可能な理屈を投げたにすぎない。理屈が立つことはともかく言おうという稚拙さが、前後二つの論理を不整合にしている。その稚拙さは、これ以外にない生の選択の切実さと切実さゆえのしぶとさから出ているものだ。

だから、二つの論理を同等に見ることはできない。むしろ後者が老婆の依拠する唯一の論理だと言うべきであろう。生きることを第一義とする限り、生きるうえで「しかたがなく」なした行為の善悪を問うことは意味を持たない。老婆の論理はこれに尽きている。人間は誰でも生きている限りしかたなく悪に従う。誰もがしかたなく悪を生きる世界で、しかたがなく犯した悪をと

がめられる人間などいない。自分は他人の悪を許し、他人は自分の悪を許すようにして人間は生きている。老婆の論理はこのような庶民の生活感情を代表するものである。〈生きることの前では、善悪に価値はない〉という論理、「仏像や仏具を打ち砕いて」「薪の料に売っていた」（P一八七・7～8、9）価値崩壊の時代の庶民の、惨めさとしぶとさが同居した、いわば〈生存の庶民的ニヒリズムの論理〉である。それを盗人猛々しい居直りと見て、自己正当化の詭弁と読むのは倫理的すぎる読み方である。また、世間智の偽善を嗅ぎ取り、唾棄するのも偏した見方である。人倫に背く死者の冒瀆という異常な行為も、無力な老婆の生きる場所から発する老婆の語りの中では、生きるための最小の悪、文字どおり「しかたがない」行為の一つとして捉えられている。

注意する語句

＊彼女は怒りのあまりわなわなと震え出した。

冷ややか…態度が冷淡なさま。

＊冷ややかな視線を向ける。

口ごもる…返答に窮するなどして、言うのをためらうさま。また途中でいうのをやめるさま。

＊その問いに彼は思わず口ごもった。

現に…目の前に。現実に。実際に。

＊目撃者が現にここにいるのだから、うそをついても無駄だ。

大目に見る…緩やかに扱って、とがめない。寛大に扱う。

＊子供なので、失敗しても大目に見てもらえる。

わなわな…恐怖や怒り、寒さなどで身体が震えるさま。

（＊で用例を示した）